

学内広報

2025.4.23

no.1593



令和7年度学部入学式で祝辞を述べる土井香苗様



令和7年度役員等の紹介
令和6年度卒業式・学位記授与式
令和7年度学部入学式・大学院入学式

令和7年度役員等の紹介

総長

藤井 輝夫

理事・副学長

相原 博昭 経営企画、予算配分、教員人事、施設
齊藤 延人 研究、懲戒、病院
森山 工 教育、情報
藤垣 裕子 学生支援、入試・高大接続、評価、研究倫理
林 香里 国際、ダイバーシティ&インクルージョン
津田 敦 総務、150周年記念事業、社会連携・産学官協創

理事

菅野 暁 財務（CFO）、資産活用
角田 喜彦 事務組織、人事労務、法務、コンプライアンス
岩村 水樹 コミュニケーション戦略

監事

亀井 純子
山口 大介

執行役・副学長

浅見 泰司 教育基盤
太田 邦史 総長特命、学術長期構想、入試企画
河村 知彦 コミュニケーション戦略推進
岸 利治 研究力強化、環境安全、監査
玄田 有史 国際卓越研究大学構想とりまとめ
佐藤 岩夫 ガバナンス改革
佐藤 健二 学術資産活用戦略
染谷 隆夫 産学連携、スタートアップ
田浦 健次郎 DX推進、情報システム
出口 敦 施設・資産活用企画、GX推進

執行役

岩垂 廣親 財務（副CFO）
小関 敏彦 CoD設置準備
高橋 喜博 総長業務事務統括（CoS）

福島 毅

資金運用（CIO）

三島 龍

事業開発（CDO）

副学長

秋山 聡 地域連携推進、ファンドレイジング
伊藤 たかね ダイバーシティ教育、多様性包摂共創センター、SOGI多様性
大橋 弘 産学協創、研究インテリジェンス推進
岡部 徹 経済安全保障、安全保障輸出管理、利益相反、国際協創、ファンドレイジング
坂井 修一 図書館
星 岳雄 東京カレッジ
真船 文隆 学生エンゲージメント、学部教育改革
矢口 祐人 グローバル教育センター、CoD設置準備推進
吉江 尚子 ダイバーシティ研究環境実現、ハラスメント防止

副理事

遠藤 勝之 研究推進、研究倫理、研究費・研究不正対応
小川 友明 資産活用推進
蔭山 達矢 教育・学生支援
小寺 孝幸 HR経営
櫻井 明 社会連携・産学官協創、GX推進
平野 裕士 CoD
松井 正一 ダイバーシティ&インクルージョン推進
水上 順一 柏地区事務機構長、DX推進、イノベーションコリドー
山本 貴史 社会人教育

総長特別参与

大久保 達也 GX推進
沖 大幹 GX国際連携、GX教育
喜連川 優 DX推進戦略、AIデザイン
坂田 一郎 ビジョン形成、アントレプレナーシップ教育推進、アカウントビリティ推進

総長特使

石井 菜穂子 グローバルコモンズ
道田 豊 国連海洋科学の10年

総長特任補佐（副学長待遇）

大越 慎一 大学院改革
南學 正臣 医学系国際協創、ライフサイエンスイノベーション

総長特任補佐

有馬 孝尚 財務改革、総長ビジョン検討、IR
五十嵐 圭日子 社会連携・産学協創推進
池田 誠 産学協創推進、半導体戦略
石井 健 生命系国際協創推進
和泉 潔 スタートアップ支援推進
稲見 昌彦 図書館DX推進、クリエイター教育推進
岩田 覚 総長ビジョン検討
岩田 忠久 産学協創推進
江頭 正人 社会連携教育推進
北村 友人 国際戦略企画
齊藤 英治 国際卓越研究大学構想策定
佐藤 仁 GX国際連携推進
塩見 淳一郎 CoD企画調整推進
鈴木 綾 社会起業推進
菅野 智子 知財活用戦略
高橋 浩之 イノベーション戦略
津本 浩平 産学協創・研究力強化
鶴見 太郎 総長ビジョン検討
寺師 弘二 産学協創推進、量子戦略
中尾 彰宏 次世代サイバーインフラ活用、産学協創推進
額賀 美紗子 入試企画
ベニントン マイルス デザインビジョン、CoD設置準備推進
福留 東土 学術長期構想検討、CoD設置準備推進
松田 陽 学術資産活用推進、150周年記念事業推進
求 幸年 起業家教育の国際化
両角 亜希子 総長ビジョン検討、新しい大学モデル構想推進
八木 俊介 経営企画推進
脇原 徹 企業リエゾン推進、安全保障輸出管理支援
渡辺 安虎 中長期財務戦略
割澤 伸一 産学協創・社会連携推進、イノベーションコリドー推進

新役員等の略歴と就任挨拶

世界の公共性への奉仕に向け、新たなステージへ

現在、東京大学は、国際卓越研究大学の第2期公募に応募すべく、総長を筆頭に全学を挙げて準備を進めています。このたびその構想のとりまとめを仰せつかりました。5月半ばには公募が締め切れ、段階的審査を経て、今年度中に採否が決定する予定です。構想と申請にかかわる学内のみなさんのこれまでのご理解とご協力に改めて感謝申し上げます。

東京大学憲章の「学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を求め、世界最高水準の教育・研究を維持・発展させる」という目標のさらなる追求に向け、東京大学は新しいステージに大きく踏み出します。引き続きお力をお貸しください。

昨年度同様、人文社会科学研究力強化も担当

いたします。科所長の先生方をはじめ、教職員のみなさんから多くの問題意識をうかがい、学ばせていただいています。人文社会科学振興ワーキンググループからは、業務時間の徹底した把握と縮減の他、本学の人文社会科学について学内外への発信を強化し、可視化していく取り組みなどのご提案をいただきました。日本の人文社会科学の国際発信や国際貢献の拡大に新たに組みむとともに、UTokyo BiblioPlazaの掲載充実や若手への学術成果刊行助成も着実に進めていきます。

長い歴史を通じて、時代や地域からなる多様性や多元性を尊重する文化を育んできた本学の人文社会科学研究の持続的発展に尽力いたします。今後ともよろしくお願いします。

執行役・副学長

玄田 有史

GENDA Yuji



昭和63年3月 本学経済学部卒業
平成4年3月 本学経済学研究科第Ⅱ種博士課程退学
平成14年4月 本学社会科学研究所助教授
平成19年4月 本学社会科学研究所教授
令和3年4月 本学社会科学研究所長
令和6年4月 本学副学長
専門分野：労働経済学
研究内容：1) 玄田有史（編著）「人手不足のになぜ賃金が上がらないのか」慶應義塾大学出版会、2017年。2) Genda, Yuji. "Jobless Youths and the NEET Problem in Japan," *Social Science Japan Journal*, 10 (2007): 23-40.
趣味：大学界隈散歩、古居酒屋

ふたつの使命を受けて

この度、総長業務事務統括の執行役（Chief of Staff）を拝命いたしました。

近年の大学の機能拡張に伴い、執行部における役割や責任および指揮命令系統を明確化するため、ガバナンス改革が検討されております。

Chief of staffは、役員と共に総長の意思決定の支援や体制強化計画の実現に向けた対応に対し、迅速な検討や実行し、また、執行部と各事務部との支点となる役割を担う事になります。

2023年4月より副理事に就任し、総長業務支援統括として従事してまいりましたが、今後はこれまで以上に皆様とともに進んでいければと考えております。

ふたつ目の使命として、ガバナンス改革にお

いては、事務職員の権限や責任を明確化し、必ずしも教員の判断が必要でない事項について、事務職員へ決定権限を移すことで、教員の教育・研究時間が確保され、また事務職員の活躍の場を拡大することとされております。

これまで、教職協働は様々な場で行われてきましたが、今回の役割は、その具体的な形の一つとして示されたのではないかと感じております。

本学の事務職員としては、初の役員としての役割であり、後進が絶えることの無いように、緊張を感じながら、しっかりとした足跡を残せるよう、邁進していきたいと思っておりますので、今後ともご指導方よろしく申し上げます。

多様な声に耳を傾ける

2024年度は総合文化研究科長・教養学部長として、学生のみなさんと真剣に向き合うことの多い年でした。授業料改定の際には、総長対話の前後にわたって教養学部自治会から何度か要望書を受け取りました。また年末には、学修環境向上のための総長懇談会も駒場キャンパスで開催され、多くの要望が寄せられました。これらを通して、私自身も大学の在り方について改めて考える良い機会となりました。

今回、学生エンゲージメントと学部教育改革を担当することになりました。学生エンゲージメントでは、総長対話やアンケートを踏まえた藤井総長からのメッセージの中の、「学生のみなさんから現在の修学の状況や意見を聞く仕組みを早急に整備するとともに、学生に関わりの

ある事柄について一緒に考える仕組みを丁寧につくっていききたい」という思いを実現することがミッションとなります。多様な声に耳を傾け、教育の質向上を目指していくことになります。また、学部教育改革では、国際社会から求められる、複雑な世界的課題にも対応できる人材の育成という方向に一層視点を広げ、「そのために必要な学部教育とは何か」を問い続けていくことになるだろうと思います。

東京大学はこうあってほしいと思う姿、思い描く将来像は、教職員・学生のみなさん一人一人異なると思います。なるべく多様な声に耳を傾け、本学の益々の発展に尽くしていきたいと思っております。

資産活用を推進し大学経営に貢献する

このたび、副理事として、資産活用推進を担当することになりました小川です。

当然のことながら、最も歴史があり最大規模を誇る東京大学は、様々なキャンパスの移転整備に取り組んできましたが、要する労力と時間が必要となります。こと柏キャンパスについては、大きな移転整備に施設部で携わり、資産活用推進部では西千葉及び田無キャンパスの土地売却を経験させていただき、先が見える状況になり、一区切りとなりました。

現在は大学保有の3億2千5百万㎡の土地について、資産価値などの状況を確認できましたので、活用に向けての準備を、大小ありますが計画を進めております。

本学にとっても土地や建物の保有面積を抑制しながら、建物の再整備や有効活用を推進することは、経営的意義があることだと思いますし、私にとって、これまでの経験を生かした新たな挑戦ができることを誇りに、身を引き締めていく所存です。

また、この実現に向けての取り組みは、教職員のみなさまからのご意見、ご指導なしでは進めないものばかりです。その点では、コミュニケーションを大事にしておりますので、積極的に図りたいと思っております。なにより、明快快活に頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

執行役

高橋喜博

TAKAHASHI Yoshihiro

平成元年4月 東京大学採用
平成23年4月 教養学部等学生支援課長
平成27年4月 本部学生支援課長
平成30年4月 本部社会連携推進課長
令和3年4月 生産技術研究所事務部長
令和5年4月 本学副理事
趣味：サーフィン、登山



副学長

真船文隆

MAFUNE Fumitaka

平成元年3月 本学理学部卒業
平成3年3月 本学理学系研究科修士課程修了
平成6年3月 本学理学系研究科博士課程修了 博士（理学）
平成6年4月 本学理学系研究科助手
平成9年3月 豊田工業大学客員助手（常勤）
平成15年4月 本学総合文化研究科助教授
平成22年11月 本学総合文化研究科教授
令和5年4月 本学総合文化研究科長・教養学部長
専門分野：物理化学
研究内容：1) Mafuné, Fumitaka. 他3名 "Hydrogen Storage Capacity of Cobalt Cluster Ions." *J. Phys. Chem. A* 128 (2024): 3516-3528. 2) Bakker, M. Joost. Mafuné, Fumitaka. "Zooming in on the initial steps of catalytic NO reduction using metal clusters." *Phys. Chem. Chem. Phys.* 24 (2022): 7595-7610.
趣味：街歩き、自転車乗り



副理事

小川友明

OGAWA Tomoaki

平成元年9月 国立天文台採用
平成8年4月 本学施設部建築課
平成28年4月 千葉大学施設環境部建築環境課長
平成30年4月 本学施設部管理課長
令和元年4月 本部施設部計画課長
令和2年4月 本部施設部施設企画課長
令和4年4月 本部資産活用推進部長
趣味：映画鑑賞、軽登山



副理事就任にあたって

このたび、副理事として、UTokyo College of Designの開設計画を担当することになりました平野です。

東京大学では、未来社会に向けてさらなる学術貢献と人材育成の役割を果たすため、藤井総長のリーダーシップのもとで、UTokyo College of Designという新しい学士・修士の教育課程の構想を全学連携で進めています。学部の新設を行うのは本学では1958年の薬学部以来約70年ぶりとなります。

2027年9月の開設を目指し、College of Design企画調整室を中心に、全学からご協力

いただいている教員、職員が一体となって、カリキュラムやコンテンツの構築、アドミッションの設計、文部科学省への設置申請準備などの仕事を行っています。

東京大学は2027年に創立150周年を迎えます。

150年という歴史の中で、長きにわたり本学で働かせていただいていること、そして、UTokyo College of Designの開設計画という大きな事業に、前向きで熱い気持ちを持った教員、職員と一緒に仕事をする機会を与えていただいたことを感謝し、副理事就任にあたってのご挨拶とさせていただきます。

副理事

平野 裕士

HIRANO Yuji



平成2年11月 本学採用
平成25年4月 本学医科学研究所管理課長
平成28年4月 本学本部人材育成課長
平成30年4月 本学工学系・情報理工学系等総務課長
令和2年4月 本学経済学研究科等事務長
令和4年4月 本学社会連携部長
令和6年4月 本学企画調整役
趣味：ラグビー観戦、週末ソフトボールからの昼呑み

退任の挨拶

先端生命科学の発展と国際協創

この2年間、先端生命科学の発展と国際協創に関連した東京大学の事業を担当いたしました。自分自身の研究にも近い内容でしたので、これまでの経験を活かしつつ、更に新しい経験を積むことができました。

国際協創に関しては、国際協創海外研究拠点の学内での位置づけ、具体的な拠点の選定などを担当しました。新しい試みなので、それなりのスピ

ード感を持って拠点を形成することが必要でしたが、カロリンスカ研究所の最初の拠点が認定され、学内における拠点の位置付けについてもほぼ議論を終えることができました。

ライフサイエンスイノベーションに関連しては生命科学関連の研究者が一か所に集まって研究を行うための環境について、多くの部局の方と議論する機会を得ました。このような生命科学研究の

前副学長 岡部 繁男

全学としての体制整備の中で、ニューロインテリジェンス国際研究機構(IRCN)の活動も発展させていく必要があります。私の任期中にIRCNの今後の運営についてもその土台が形成されたことは何よりと思っております。

今後も東京大学における生命科学研究の環境整備と国際協創が順調に発展することを願っております。

産学協創による医療技術開発力強化に向けて

昨年度1年間、産学協創推進および医工学イノベーション担当の副学長を務めさせていただき、医工学分野、特に医療機器開発力の向上に向けて、医学系研究科、医学部附属病院、工学系研究科、情報理工学系研究科、新領域創成科学研究科、法学政治学研究科、公共政策学連携研究部、先端科学技術研究センターなど、数多くの部局の先生方と協力し研究推進に取り組みました。また、医

学関連分野では初の産学協創協定の下に設置された「キャンボン・キャンボンメディカルシステムズ東大ラボ」のラボ長としても活動し、順調なスタートを切ることができております。これまで多大なるご支援をいただいた本学の役員、教員および教職員の皆様へ、深く感謝申し上げます。

医工学イノベーションの実現には、新たな医療技術を開発するだけでなく、生命倫理や臨床研究

前副学長 佐久間 一郎

データの利活用に関する倫理的配慮、個人情報保護、医療技術の価値評価、事業化に関連する規制対応や社会保障制度との整合性など、多方面からの考察が求められます。東京大学が持つ多様な関連分野の専門家の力を結集すれば、世界有数の医療技術開発拠点を形成できると確信しております。その発展を心より祈念いたします。

持続可能な社会のために

農学生命科学研究科長を退任後、副学長としてグリーントランスフォーメーション（GX）推進を2年間担当しました。これまでの取り組みにおいては、学内の教職員や学生の皆さま、そして学外の関係者の皆さまと連携し、多くの支援とご協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。特に、生物多様性の保全やエネルギー効率向上、資源循環型社会の構築に向けた取り組みでは、関

係者の皆さまと意見を交わし、多くの学びを得ることができました。

2025年4月には、GX戦略推進センターが発足いたします。このセンターは、カーボンニュートラル、ネイチャーポジティブ、サーキュラーエコノミーを3本の柱として、キャンパスをリビングラボとして捉えたさまざまな活動を推進し、その成果を地域、国、グローバルに展開することを目的

前副学長 堤 伸浩

としています。大学が単独でGXを達成することは不可能であり、社会全体の変革と同調する必要があるとあります。持続可能な社会の構築には、まだまだ多くの課題が山積しています。これらの課題解決に向けて、大学が果たすべき役割に大きな期待が寄せられています。新年度からは、特命教授として引き続きGX戦略推進センターの活動をお手伝いいたします。今後ともよろしくお願い申し上げます。

大学の新たな領域として経済安全保障の施策を構築

3月をもって副学長を退任いたしました。2023年までは、産学連携やスタートアップ投資などを執行役・副学長として担当しておりましたが、2023年度をもって執行役を退任し、引き続き担当する業務として、出資事業、経済安全保障、安全保障輸出管理を担当し、子会社および関連会社のガバナンス、貨物や技術の輸出全般のコンプライアンス等に従事してまいりました。いずれも個別案件の丁寧な対

応に加え、事案によっては政府との緊密な連携が求められる分野でしたが、部局、関係者の皆様のご尽力のおかげで、大過なく任務を終えることができましたことを、望外の喜びと存じます。

また、経済安全保障は私自身が研究に取り組んできた分野ではありますが、大学にとっては新たな領域であり、施策を一から構築する必要がありました。その点において、リサーチセキュリティ

前副学長 渡部 俊也

に関する情報共有や能力構築支援を担う「大学セキュリティコンソシアム」が1月に東京大学主導で設立され、国内のみならず国際的な協力体制が整ったことは、大きな一歩であると感じております。

これまでお世話になった藤井総長をはじめ役員の先生方、本部事務部、そして全学の皆さまに心より感謝申し上げますとともに、本学が今後ますます発展することを心より祈念いたします。



令和6年度学位記授与式



令和6年度学位記授与式が、3月24日（月）に、安田講堂において挙行されました。今年度の学位記授与式も第一部・第二部・第三部の3回に分けて挙行され、音楽部管弦楽団によるモーツァルト作曲「ディベルティメント ニ長調 K.136」の演奏の流れる中、総長をはじめ、理事・副学長、各研究科長並びに来賓の國部級 東京大学校友会会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。藤井輝夫総長から各研究

科の修了生代表に学位記が授与され、修了生に向けて告辞が述べられた後、来賓の國部校友会会長から祝辞をいただきました。その後、修了生総代（第一部：工学系研究科 曹 明顕さん、第二部：人文社会系研究科 関 慎太朗さん、第三部：学際情報学府 山田 渉さん）から答辞が述べられ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、修了生とそ

総長告辞



本日学位記を受け取られるみなさん、修了おめでとうございます。ご家族のみなさまにも、東京大学を代表して、感謝の気持ちと、心からのお祝いを申し上げます。

東京大学の大学院において、自分の研究テーマを選び、答えがわからない問題に没頭して取り組んだ経験は、これからのみなさんのかけがえのない財産となるでしょう。ある事象をさまざまな角度からとらえ直してみる面白さや楽しさを、ときどきは思い出していただきたいと思います。そして、未解決の課題と向かいあって、探究心を抱き、想像力を羽ばたかせることを大切にしてください。学位記授与式という、みなさんそれぞれの未来に向けた「旅立ち」の日にあたり、そんな

はなむけの言葉を贈りたいと思います。

さて、みなさんは「旅立ち」という言葉を聞いて、どんな交通手段を連想されるでしょうか。多くの方が鉄道や飛行機を思い浮かべるかと思います。昭和の時代なら、なんといっても鉄道でしょう。汽車を待つ恋人の横で、一人時計を気にしている自分の割り切れない気持ちを歌った「なごり雪」は、私が小学生の時代の曲ですが、いまでもよく歌われます。みなさんもどこかで聞いたことがあるかもしれません。

2本の鉄のレールと蒸気機関車の組みあわせは、大勢の人や大量のモノを遠くまで速く運ぶことを可能にした新しいテクノロジーで、19世紀の人びとの移動のしかたを大きく変えます。しかし、海で隔てられたところに行くには、巨大な内燃機関を備えた船を使う必要がありました。船もまた、さまざまな国に多くの移民や旅行者を運んでいきました。みなさんにとって当たり前の、空を自由に飛ぶ飛行機が登場するのは、20世紀に入ってからです。

飛行機は、内燃機関の強力な動力のうえに築かれたフロンティア技術であり、それまでにない新しい移動手段でした。日本における

この技術の発展には、じつは東京大学も深く関わっています。冒険者たちが最初に空を飛んだ20世紀初頭から10年も経たないうちに、世界で急速に技術開発が進みます。たとえば多くの標準的な翼型を定めた米国のNACA（アメリカ航空諮問委員会）は1915年に設立されました。日本では、先を行く欧米の技術力に追いつこうと、1918年、東京帝国大学に航空研究所が設立されます。

ここで、飛行機が空を飛ぶ原理の基礎や実装に関わる研究が行われました。人工的に発生させた風のなかに縮小模型を置き、翼や胴体に生じる力を計測する「風洞」という装置が作られます。直径3メートルの巨大な風洞は、1930年代当時、最先端の実験装置で、長距離飛行世界記録をつくった航研機という試験飛行機の開発に貢献します。戦後の東海道新幹線の初代車両0系、国産旅客機YS-11の製造においても、たいへん重要な役割を果たしていきます。この風洞は、その後、ヘリコプターの専門家で生き物の飛行や泳法まで研究した東昭先生、その研究を微小スケールの生物や植物の種などにまで広げた河内啓二先生に引き継がれました。河内先生は、私の博士論文の副査でもあり、この風洞の建物に通い、たびたびご指導いただいたことを思い

出します。

飛行機を含む航空機の開発が、大学における専門講座の創設と併行して、附置研究所で行われたことには、歴史的な意味があります。浮力を生み出す翼や胴体の流体力学的な性能と構造強度、動力としてのプロペラ、制御システム、操縦者の訓練など、飛行機という総合技術を新たに構築するには、既存の学問分野の垣根を越えた人びとの協力が必要だったはずです。大学に研究所を設置して取り組むことは、そうした学際的かつ総合的な協力と創造が活性化し、実用化へと向かう場をつくりだすことに他なりません。航空研究所第7代所長の和田小六は、「大学のもつ自由な学問的雰囲気なしにoriginalな研究は生まれてこない」と述べ、個々人の自由な研究と共同の目的への貢献を調和させる方法の一つが研究所である、としています。

同じ時代に東京大学では、伝染病研究所にはじまる医学研究所や、地震の学理と震災予防に取り組む地震研究所が設置され、いまでは新聞研究所から発展した情報学環、また東洋文化研究所、社会科学研究所、生産技術研究所といった多くの組織を有しています。これはすなわち、それぞれの時代において必要とされる社会的・世界的な課題に数多く取り組んできたからに他なりません。航空研究所を前身とする先端科学技術研究センターがいま、バリアフリーの実現など文系と理系の垣根を越えた領域横断の研究活動を行っている背景には、こうした歴史があるともいえます。

それにしても飛行機の発達と普及は、人やモノの移動と交流を一気に地球規模に拡大しました。19世紀には数か月かかったニューヨーク・シンガポール間を約19時間で移動することができます。その意味では、20世紀のメディア論者マーシャル・マクルーハンが「地球はひとつの村になった」と論じ、Global Villageと呼んだ感覚の顕在化に、飛行機は大きく貢献したともいえるでしょう。

1985年7月13日に催されたアフリカの飢餓を救うライブエイドのコンサートで、午後にロンドンのウェンブリースタジアムで歌ったフィルコリンズが、コンコルドでアメリカへ移動して、その夜にはフィラデルフィアのケネディスタジアムで歌っていたという離れ業が、私の印象にも強く残っています。コンコルドは収益性や環境影響等の問題で2000年代初頭には現役を退きますが、3時間足らずでニューヨーク・ロンドン間を移動できる、マッハ2を超す速度の超音速旅客機でした。

一方で、迅速で自由な移動が、予想もしなかった不都合をもたらすことがあります。COVID-19やアフリカ豚熱などの病原体が、人の移動に伴って驚くような規模と速さで世界中に広がったことなども、その負の側面です。また、飛行機利用の普及は、主要な空港を発着する航空便の劇的な増加と過密とを生みだしました。パイロットに離着陸の指示や情報を与える管制業務は、錯綜する課題をそのつど解決しなければならない複雑で高度な作業になってきています。そうしたなかで2024年1月に発生した羽田空港での衝突炎上事故や、今年に入って起きたワシントン上空での軍用ヘリとの空中衝突など、トラブルが起こっているのも事実です。さらに、半導体をはじめとする精密機器・部品など産業に必要な物資が、現代では飛行機によって運ばれています。航空便で結ばれたサプライチェーンが自然災害や戦争などで断ち切られないよう、強靱化していかなければならない、という課題も浮かびあがってきました。

新たな科学技術が社会に与える影響は大きく、技術が引き起こすさまざまな負の側面についても、顕在化する前に芽を摘む努力が今後ますます重要になります。航空機に関して言えば、水素燃料などの持続可能な航空燃料の開発といった資源問題から、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）による第6次報告書が取りあげた飛行機雲の功罪まで、考えるべき要素は多方面に広がっています。

新たなものをつくりだす創造力（creativity）だけでなく、まだ見えていな

いものを描き出す想像力（imagination）を養わなければなりません。

50年前に本学経済学部の宇沢弘文教授は『自動車の社会的費用』という著作で、交通事故死傷者の多さや、騒音公害、大気汚染、子どもたちや老人が道路を安全に歩けない状況など、自動車に関わるさまざまな問題を取り上げ、それらを解決する公共政策形成の重要性を指摘しました。その公共性を支える「社会的共通資本」とは、社会が持続していくための基盤としてなくてはならないが、市場経済の原理だけにゆだねたのでは適切に配分されない資源のことです。具体的には、道路・水道・電気などの都市インフラや教育・医療などのサービスが挙げられます。そうした基盤の価値を実感してもらうために、あえて自動車利用において生じている費用すなわち損害を「定量化」して提示し、人びとに議論を呼びかけます。

その一方で、価値を貨幣によって測ること自体の問題を指摘していることも大切でしょう。たとえば交通事故死の損失をそのひとが生涯獲得したはずの所得の現在価値で算定する、いわゆる「ホフマン方式」が、人命の損失の不可逆性を軽視した計測方法であることを批判しています。

やがて「社会的共通資本」の考え方に、自然や文化を積極的に含めていくことになる宇沢教授の努力と情熱は、現実的にも理論的にも測りにくい現象を、どのように捉え、いかに指標化するのが望ましく正しいのかを問う、創造的な想像力（creative imagination）に支えられていたのだらうと思います。

みなさんが本学で身につけた「問う力」は学問の推進力であり、いわばエンジンです。そして多くの友人たちと共に切磋琢磨しながら獲得した知識と想像力は、まだ知らない空を飛び続けるための翼となるでしょう。みなさんの人生の旅が実り多くすばらしいものになることを、心から願っています。

本日は、おめでとうございます。



答辞 (第一部)

工学系研究科
曹 明顕さん

本日は、先生方ならびにご来賓の皆様のご臨席のもと、学位記授与式を挙行していただきましたことに、修了生一同を代表して心より感謝申し上げます。私た

ちは、東京大学において、基礎学問を自由に探究し、新たな知の創出に挑戦する貴重な機会を賜りました。私が取り組んだ研究は、透過型電子顕微鏡とマイクロマシンを組み合わせた原子分解能その場観察手法の確立および金属材料の変形素過程の解明という、極めて基礎的な学問領域に属するものでした。本研究により、原子の動的挙動を直接観察するという新たなアプローチを材料科学にもたらし、原子スケールの描像が次世代材料の設計指針に繋がる可能性を示しました。こうした成果が得られたのも、自由闊達な研究活動を尊重しつつ、的確なご指導を賜った先生方、並びに恵まれた研究環境を提供くださった東京大学のおかげであると深く感謝しております。

先人たちが長い歴史をかけて築き上げ

てきた学理に、新たな知を加えることは、決して容易な道ではありませんでした。幾度も困難に直面し、仮説と食い違う実験結果に戸惑い、研究の方向性が揺らぐこともありました。しかし、「仮説の誤りこそが学問の発展の契機となる」という先生方のお言葉を支えに、事実を冷静に受け入れ、現象の本質を理解するための貴重な手がかりとして捉え直しました。仮説を見直し、論理を再構築することで、既知の学理を一步先へ進める新たな知の創出へと繋げることができました。このような未踏の学理を切り拓いた経験は、修了生全員に共通するかけがえのない財産です。

本日もって、私たちはそれぞれの道を歩み始めます。そして、東京大学で培った高度な専門性、柔軟な思考、粘り強

く挑戦した経験を、社会に還元していく使命を担っております。現代の社会課題は複雑化しており、分野や産学の垣根を超えた協働が今まで以上に求められています。慣れ親しんだ専門分野の枠に囚われることなく、異分野や産業界と積極的に対話を重ねることで、知の循環を促し、社会全体のイノベーションに貢献していく所存です。

最後になりますが、今日に至るまで私たちを支えてくださった、先生方、職員の皆様、研究室の皆様、友人の皆様、そして家族に、修了生一同改めて感謝申し上げます。皆様のご健康と東京大学の益々の発展を祈念し、以上をもちまして、答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

答辞 (第二部)

人文社会系研究科
関 慎太郎さん

本日は藤井総長をはじめ多くの先生方のご臨席を賜り、このような盛大な学位記授与式を開催いただきましたこと、修了生を代表して心より御礼申し上げます。

私が東京大学大学院に入学した2020年4月は新型コロナウイルス感染症の影響で緊急事態宣言が発令され、多くの制約とともに大学院生活が始まりました。大学構内への立ち入りは制限され、同期との対面での交流も難しい状況が続きましたが、そのような環境下においても東京大学は学修の継続に最大限配慮してくださいました。全ての授業がオンラインで開講されたことで新たな環境での学びは軌道に乗り、図書館の資料郵送サービスは自宅にいながら所蔵資料へのアクセスを可能にしてくれました。大学院での研究は個人が取り組むものですが、私たちが腰を据えて課題に向き合う上で、東京大学の恵まれた環境は大きな支えでした。こうして学位記授与式を迎えるにあたり、私たちの研究を力強く支援してく

れた修学環境と、それを支えてくださった全ての方に改めて深く感謝申し上げます。

私が取り組んできたデジタル人文学は、人文科学とデジタル技術の融合による新たな知の開拓を目指す領域横断的な学問分野であり、国内外の多様なバックグラウンドを持つ研究者とともに様々な観点から自らの研究課題を議論する機会に恵まれました。学内では、研究科を超えて学生が集うSPRING GXや知能社会国際卓越大学院プログラムを通じた研究交流が常に私の知的好奇心を刺激してくれました。専門分野の異なる研究者と検討を重ね、違いを乗り越えながら知見を深めた経験は、新たな視点を得る喜びと、多様な知を繋ぐ対話の意義を強く実感させてくれました。

高度な専門性を備えつつ、分野を超えた知の接統を試みることは決して容易ではありません。しかし、科学技術が急速に発展する現代だからこそ、人間の協働による知的探求や合意形成は一層価値のあるものになるでしょう。東京大学で培った経験を糧とし、これから未知の領域へ果敢に挑み、新たな知の扉を開くべく努力してまいります。

最後になりますが、いつもの確なご指導をくださった先生方、研究室や勉強会で共に学び議論を深めた友人や先輩・後輩、そして常に温かく見守り支えてくれた家族の皆さんに改めて感謝申し上げます。とともに、東京大学のさらなる発展を願い、答辞とさせていただきます。

答辞 (第三部)

学際情報学府
山田 渉さん

桜のつばみかほころび始め、新たな季節の訪れを告げるこの佳き日に、教職員の皆様をはじめ、ご来賓の皆様のご臨席を賜り、盛大に学位記授与式を挙行していただきましたことに、修了生一同、心より御礼申し上げます。

また、藤井総長、並びに國部会長より温かい訓辞と激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

本学に入学して以来、私たちは数えきれない時間をそれぞれの研究に捧げてまいりました。

その日々を振り返ると、研究とはまるで未知の山の地図を描くような営みであったと感じます。

研究を始めた当初は、自分の居場所や進むべき道が分からず、先人たちが残した知識の地図を頼りに歩みを進め、少しずつ世界を理解してきました。

しかし、研究では既に描かれた道をなぞるだけではなく、その先の未踏の領域へと信念をもって進むことが求められました。

その道のりは決して平坦ではなく、行き止まりにぶつかったり、迷ったり、遠回りしたりすることもありましたが、互

いに励まし、知恵を分かち合う仲間や、導いてくださる先生方のおかげで、前へと進むことができました。

試行錯誤の末に新たな道を見つけ、地図に描き加えたときの喜びは格別であり、その瞬間は私たちにとって何物にも代えがたい経験となりました。

そして、私たちが描き加えた地図は、次の探究者たちがさらに遠くへ進むための手がかりの一つとなることでしょう。

現在の社会は、技術革新が急速に進む一方で、コミュニティ、国家、地球環境などあらゆるスケールで容易に解決できない問題が積み重なり、未来を見通すことが一層難しくなっています。

パーソナルコンピュータの父と言われるアラン・ケイ氏は、未来について次のように述べています。

「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」

私たちが研究を通して培った「地図を描く力」とはつまり、未来を描き、創造する力です。

この力を活かし、予測困難な現代社会で、それぞれが信念を持って、より良い未来を描くこと。

さらに、それを実現していくことこそ、私たちに課せられた責務であると考えます。

改めて、この場をお借りし、長年にわたりご指導くださった先生方、支えてくれた家族や友人、そして共に学び、励まし合ってきた仲間たちに、心より感謝申し上げます。

最後に、ここにお集まりの皆様が未来が希望に満ちたものとなることを願い、これからも互いに学び続け、歩み続けることを誓いながら、答辞とさせていただきます。

令和6年度卒業式



令和6年度卒業式が、3月25日(火)に、安田講堂において
 行われました。今年度の卒業式も第一部・第二部・第三部
 の3回に分けて行われ、音楽部管弦楽団によるモーツァルト
 作曲「ディヴェルティメント ニ長調 K.136」の演奏の流る中、
 総長をはじめ、理事・副学長、各学部長並びに来賓の國部毅
 東京大学校友会会長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇
 し、開式となりました。藤井輝夫総長から各学部の卒業生代表

に学位記が授与され、卒業生に向けて告辞が述べられた後、来
 賓の國部校友会会長から祝辞をいただきました。その後、卒業
 生総代（第一部：薬学部 太田美帆さん、第二部：理学部 大
 野歩実さん、第三部：農学部 内山莉緒さん）から答辞が述べ
 られ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じて
 ライブ配信され、卒業生とご家族を含む、多くの方にご覧
 いただきました。

総長告辞

みなさん、ご卒業おめでとうございます。
 今日の良き日を、この東京大学で学んだ仲間
 たちとともに迎えられたみなさん、またご家
 族をはじめ大学生活を支えてくださった方々
 に心よりお祝い申し上げます。みなさんがこ
 れから進む道は、社会人として働く、大学院
 で学ぶ、あるいは新たな分野での取り組みを
 始めるなど、さまざまでしょう。どの道も平
 坦でないかもしれません。思ったようにいか
 ず失望する日があるかもしれません。けれど
 も「失敗」を恐れて行動しないより、やって
 みた経験から学ぶことは多いでしょう。この
 大学で学んだことを思い出してみてください。
 友との語らい、部活やサークルに打ちこんだ
 日々、研究室での研鑽など、楽しく充実した
 思い出もまた、じつは小さな「失敗」に満ち
 ていたのではなかったかと思います。

みなさんの卒業を祝う場だからこそ、これ
 からのさまざまな「成功」と「失敗」をどう
 捉えたらいいのか、考えてみたいと思います。

商品開発の過程で生じた失敗が、思いがけ

ないヒット商品の開発に結びついた事例とし
 て、みなさんがいつも使っている付箋紙の
 Post-itは有名です。1968年頃3M社のスペ
 ンサー・シルバー（Spencer Silver）は強い
 接着力をもつ物質の開発実験をくり返してい
 ました。作り出された試作品は、どこにでも
 よく付くが簡単に剥がれてしまう性質のもの
 で、強力な接着剤としては明らかに失敗作で
 した。しかし、なんとかこの新しい面白い性
 質を活かせないかと、シルバーは社内のいろ
 いろなところに話をもちかけます。数年後に
 同じ会社のアート・フライ（Art Fry）が、
 聖歌隊で歌っていたとき楽譜に挟んでいたし
 おりがいつも落ちてしまうことから、紙に貼
 ったりはがしたりできる小さな紙切れがあれば
 便利なのに、と思いつきます。この二人の
 関心が出会うことによって、新しい付箋が開
 発され、全米に売り出されたのが1980年代
 でした。いまでは、まさに世界中で使われて
 います。

理系の学生のみなさんは思い当たることも
 あろうかと思いますが、大学での研究や実験
 もまた、じつは失敗の連続です。ノーベル化
 学賞を受賞した白川英樹先生の導電性高分子

（電気を通すプラスチック）の発見に、じつ
 は誤った量の触媒を入れる失敗が関わってい
 ることや、田中耕一さんのソフトレーザー脱
 離イオン化法の開発にも、アセトンと間違え
 てグリセリンを用いた失敗があったことは広
 く知られています。

こうした事例は、成功と失敗の違いが相対
 的なもので、意味づける文脈が異なれば、そ
 れらがもつ意味も変わってくることを示唆し
 ています。ですから、失敗を必ずしも否定的
 に受け止める必要はありませんし、過度に恐
 れる必要もないのです。他人の眼を気にして、
 一歩踏み出すのを躊躇するとしたら、あるい
 は自分がほんとうに望んでいることを選べな
 いとしたら、それはみなさんの未来にとって
 もったいないこと、なのではないでしょうか。

とはいえ、人は自分の失敗を認めたがらな
 いという現実も、正しく見すえる必要があります。
 新しい一万円札の顔となった渋沢栄一
 の孫で、本学経済学部で学び、戦時中から戦
 後にかけて日銀総裁、大蔵大臣を務めた渋沢
 敬三に、「失敗史は書けぬものか」という短
 いエッセーがあります。そこで渋沢は、わが

国の銀行・会社の社史や、学校や市町村の歴史をみると、ほとんどが「成功づくりの自慢史」であって、失敗の歴史が書かれていないことを指摘し、「真の成功は失敗を素直に且つ科学的に究明した上に築かれるべきもの」ではないか、と提起しています。

一人ひとりの心構えの問題だけではありません。やりそこなったりしくじったりすることを強く非難する社会において、間違いが過度に警戒され、失敗から目を背ける傾向が助長されてしまうのもたしかでしょう。残念ながら、日本の社会は失敗にやさしくないというのが通念となっているようです。さらに、感染症の蔓延によって促されたネット空間の進化・発展、とりわけSNSの急激な浸透・普及もまた、一面において社会の不寛容さを強めています。対話相手の考えや感情を思いやる術を十分に身につけていない状態で匿名性が高いSNSの社会に参加すれば、おのずから言葉遣いは攻撃的で一方的となり、互いに不寛容となってしまう。

しかしながら、こうした新しい形態の社会やそこで培われる文化もまた、人間がつくりあげるものです。そうであるからこそ、人間が変えていける、より良いものにしていけることを忘れてはなりません。他者に対する寛容、すなわちやさしさもまた、私たちが主体的に選びとるものであるといえます。

不寛容は失敗のコストを引き上げることで、新たな挑戦をさまたげます。それはイノベーションの停滞を招きます。

組織行動の研究分野では、知識の活用(Exploitation)と探索(Exploration)のトレード・オフに関する議論が知られています。つまり、既存の知識の活用なら大きなリスクを冒さずに一定のリターンが得られるけれども、一方で相応のリスクをとってでも新規の知識を探索しなければ、やがて環境への適応が困難になるという議論です。新規事業の展開に失敗はつきものであり、それを許容しないと企業はより深刻な業績不振にいずれ陥る、

というわけです。

また、失敗という結果にとらわれずに、新たなことへの挑戦それ自体をむしろ評価する姿勢も大切です。

オリンピックのスケートボード競技をご覧になった方は、この競技が共有している文化の違いに気づかれたことと思います。結果としての成績だけでなく、難度の高い大技に挑もうとする精神が、アスリートのコミュニティで高く評価されているからです。初めて正式種目に採用された4年前の東京オリンピックでも、岡本碧優選手が難易度の高い技に挑戦して失敗し、期待されていたメダルを逃しました。ですが岡本選手は、パフォーマンス終了後、成績上位の多くの選手達に抱え上げられ、他の誰よりも熱烈にその大技への挑戦が称賛されていました。こうしたアスリートたちの姿は、広く世界に感動を与えました。

みなさんご存じのように、シリコンバレーは、米国、あるいは世界のイノベーションを牽引する場として、数多くのスタートアップやいわゆるユニコーンを生み出してきました。これは米国西海岸という地理的な条件とも相まって、シリコンバレーそのものの成立と深く関わるものだとも言われています。とりわけ、失敗を歓迎し、時には称えることさえする文化は、まさにシリコンバレーにおけるCreativeなエコシステムの原点だとされています。リスクを取って挑戦すること、そしてなによりも、どこで、どのように失敗をしたのかを、あとから取り出し可能なかたちで覚えておくことが重要です。同じ問題に遭遇したら、失敗からの学びを活かして解決することができるでしょう。失敗したことを「次」に活かせることがまた、シリコンバレーのイノベーションを支えています。

いま生成AIが劇的な速さで進化を遂げているのは周知のとおりです。このAIが進化するうえで、エラーつまり間違いが生まれる

ことは決定的に重要な意味をもちます。AIはエラーを繰り返す過程を通じて学習し、さらに精度の高い回答を返せる存在へと成長していきます。エラーを失敗として認識し、それを補正する改善を人間が組みこまなければ、AIの学習は進みません。

つまり、ただただ失敗すれば成長できるわけではない、ということです。かえりみる必要があり、また新しいとらえ方を前向きにデザインすることが重要になるでしょう。失敗に対する不寛容の根本的な払拭には、社会全体の行動変容も必要になるのかもしれませんが、足もとの現場からできることもあるでしょう。みなさんは経験を重ねるにしたがって、より多くの自由を得るとともに、自分の行動の結果に対して、より大きな責任を引き受ける立場になっていきます。だからこそ、あらかじめさまざまなリスクを念頭において失敗を恐れずに挑戦し、その失敗から学んでいただきたいと思います。その学びは必ずやさらなるステップアップにつながるものだからです。

これまで大学で行ってきた研究を思い返してみてください。哲学の思弁においても、文学の解釈においても、歴史の実証においても、経済の検証においても、科学の実験においても、失敗したときにはじめて、何が本質的な問題であったのかに気づくことはなかったでしょうか。そのようなことを数多く経験されたのではないかと思います。

この東京大学で積み重ねてきた試行錯誤の経験は、みなさんの未来に引き継がれた大きな財産です。それぞれの未来が、多くの仲間たちにとっても望ましく、喜ばしいものとなることを願っています。

本日はご卒業まことにおめでとうございます。



答辞（第一部）



薬学部
太田美帆さん

本日は、私たち卒業生のためにこのような式典を催していただき、誠にありがとうございます。また、藤井総長、國部校友会会長よりお言葉を賜りましたこと

に、重ねて御礼申し上げます。

卒業という節目にあたり大学生活を振り返ると、驚くほど一瞬であるように感じられます。4年前の春、緑豊かなキャンパスに足を踏み入れ、新たな地での生活に心ときめかせていたことが、昨日のことに思い出されます。学びの選択の幅が一気に広がり、リベラルアーツを核とする恵まれた環境での学生生活が始まったことを次第に自覚したものです。関心の向くまま様々な講義に参加し、知識を深めるだけでなく、自分は何をしたのか、どうありたいのか、そうした問いに向き合い、自分自身と対話する時間を得ることができました。同時に、多様な背景を持つ仲間との交流を通じて、自分を客観視する機会にも恵まれました。

その後、私は薬学部薬科学科に進学し

ました。生物・化学・物理に加え、医薬品が世に出るまでに議論される社会的な枠組みについての専門知識が体系化され、医薬品が多岐にわたる知識と技術の結晶であることを学びました。私の所属する研究室では、医薬品の主要な標的であるタンパク質がもつ動的な特性と機能の関係を解明し、よりよい薬の開発につなげる基礎研究に日々取り組んでいます。4月からは修士課程に進み、さらに研究に邁進したいと考えています。

私たちが今後歩む道の中では、向き合うべき課題が、より広く、より深くなっていくでしょう。身近な課題だけではなく、複雑で流動的な現代社会の様々な問題に対しても、自らの課題として主体的に向き合う姿勢が求められると思います。まずはありのままを把握し、試行錯誤を

重ねながら課題の本質を見極め、柔軟な姿勢で取り組み続けることができれば、その過程で得られる学びこそが何より大きな財産となるのだと信じています。これから多様な道を進む私たちは、互いの学びを繋ぎ合わせ、現状から目を背けることなく、困難な課題にも立ち向かっていきます。そして、希望と誇りを胸に、より良い「今」を築き上げていくために学びを重ね、歩み続けていきたいと思います。

最後になりましたが、本日に至るまでご指導、ご支援くださった先生方、職員の方々、共に学び、語り合った友人たち、そして、私たちを温かく見守り続けてくれた家族に、心より感謝申し上げます。皆様方のご健康と東京大学の益々の発展を祈念し、答辞といたします。

答辞（第二部）



理学部
大野歩実さん

本日は、私たち卒業生のためにこのような素晴らしい式典を開いていただき、卒業生一同心より感謝申し上げます。また、ご多用の中ご臨席くださった教職員

の皆様、ご来賓の皆様、重ねて御礼申し上げます。

私の4年間の学生生活は、多くの学びと挑戦の機会に恵まれた時間でした。前期教養課程では、サークル活動や先輩方との出会いを通じて幅広い教養を身に付けるとともに、コンピュータの仕組みに強い関心を抱くようになりました。

後期課程では理学部情報科学科に進学し、体系的な情報科学の授業や厳しい実験を経験するなかで、より深い知識と技術を身に付けることができました。ご指導くださった先生方、互いに切磋琢磨し合った友人に、心より感謝申し上げます。

さらに、4年次には大学からご支援をいただき、世界最大級の女性・ノンバイナリー技術者の祭典であるGrace Hopper Celebrationに参加しました。

また、Kunoichi Cyber Gameという女性を対象としたサイバーセキュリティ分野の世界大会に、日本チームのキャプテンとして出場する機会も得ました。女性が少ないこの分野で活躍し、卓越した技術力を発揮されている方や、より良い環境を創ろうと積極的にアクションを起こされている方々の存在に肌で感じ、大きな刺激と意欲を得られました。

Kunoichi Cyber Gameを通じて暗号やセキュリティ分野への興味が一層深まり、卒業研究では新しい計算ハードウェアにおける暗号計算の高速化に取り組みました。自ら手を動かし、新たな知見を見いだす貴重な経験を積めたのは、指導を続けてくださった先生や先輩方のおかげです。心より感謝申し上げます。

今後は大学院に進学し、暗号計算だけ

でなく、サイバーセキュリティ全般を支えるコンピューティング技術の創出に貢献したいと考えております。また、これまでいただいた数々の機会に感謝しながら、次の世代をリードしていけるよう、一層精進してまいります。

最後になりましたが、本日に至るまで私たちを導き、支えてくださった先生方、職員の皆様、ともに学び合い励まし合った友人たち、そして何より私たちを温かく見守り続けてくれた家族に、改めて心より感謝申し上げます。東京大学のさらなる発展と、皆様のご健勝をお祈りしながら、これをもちまして答辞とさせていただきます。

答辞（第三部）



農学部
内山莉緒さん

二兎を追う者は一兎をも得ずという諺があります。しかし、私の6年間の獣医学生としての学生生活は、常に好奇心に突き動かされた結果、何羽もの兎を常に

追っているようなものでした。自分の弱さや無知を認め、助け合うことのできる友人に出会えたことは私の大きな財産であり、今後どのような困難に直面しても生きていける糧となると確信しています。

特に印象的なのは、駒場祭・五月祭の実行委員会での活動です。コロナ禍では学園祭開催自体が危ぶまれ、学術文化活動の発表の場たる学園祭はどうあるべきか、時々刻々と変化する状況の中で最善の策は何か、他の委員と毎晩夜中まで議論しました。

試行錯誤の日々の中で、豊富な知識に裏打ちされた優れた論理的思考力を持つ友人たちに出会い、「学びの醍醐味とは体系的に身につけた知識を、実生活における問題解決へ還元できるようになることなのだ」と実感し、私もそうありたい

という憧れが、その後の学びの原動力になりました。

実行委員引退後は、獣医病理学研究室での日々が始まりました。カエルからライオンまで様々な疾病動物の病態解明や死因特定を目的として、専任教員が行う病理解剖業務に参加できたことは大変貴重な経験でした。また、卒業研究を通し、前人未到の領域に踏み出すことの意義と困難さを学びました。

そうした研究生生活の傍ら、70単位以上にわたる人間の心理学に関する科目の履修、体験活動プログラムへの参加、狩猟免許や保育士などの資格取得、野生動物の保護について学ぶための台湾留学など、興味を持ったことには躊躇せず挑戦しました。こうした学びの機会が多く提供される環境こそが、東京大学で学ぶ価

値なのだとは私は感じています。一見関係のない分野でも、知識の点と点が繋がり線になっていく感覚は、私に、もっと学びたいという飽くなき探究心・好奇心を与えてくれました。卒業後、私は獣医学とは直接は関係のない企業に就職しますが、無関係に見えることでも切り捨てずに虎視眈々と狙い、我がものとする精神を持ち続けたいと思います。

結びに、本日は私たち卒業生のために盛大な式典を催していただきましたこと、卒業生を代表して御礼申し上げます。実りある学生生活を支え、常に背中を押してくださった先生方、職員の皆様、研究室や学科の皆様、友人、家族への感謝を胸に、卒業後も、努力を惜しまず謙虚に、知に貪欲に歩んでいくことをここに誓い、答辞といたします。

令和7年度 学部入学式・大学院入学式



令和7年度の学部入学式と大学院入学式が、4月11日に日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には、約3,200名の新入生、そのご家族など約5,300名、合わせて約8,500名が出席しました。総長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇しました。式では、大学を代表して藤井輝夫 総長から式辞が述べられ、続いて寺田寅彦 教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の国際人権NGOヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表 土井香苗様、東京大学校友会 國部 毅 会長からそれぞれ祝辞をいただきました。その後、入学生総代 上村綾美さん（教養学部理科三類）による宣誓が行われました。

午後の大学院入学式には、約3,200名の新入生、そのご家族など約3,200名、合わせて約6,400名が出席しました。総長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓が登壇しました。式では、大学を代表して藤井輝夫 総長から式辞が述べられ、続いて平地健吾 数理科学研究科長が式辞を述べました。式辞の後、来賓の沖縄科学技術大学院大学学長兼理事長 Karin Markides様、東京大学校友会 國部 毅 会長からそれぞれ祝辞をいただきました。その後、入学生総代 白井健人さん（理学研究科）による宣誓が行われました。

両式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、新入生のご家族を含む多くの方にご覧いただきました。

令和7年度学部入学式総長式辞

新入生みなさん、ご入学おめでとうございます。本日ここにみなさんがおられるのは、これまでの努力と、ご家族や学校の先生など周りの多くの方々からの支えがあったのだと思います。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。これから大学という場において、みなさんが新しい多様な学びや経験を積み重ね、東京大学の学生として未来の可能性を切り拓いていくことを大いに期待しています。

さて、日本の社会には、読み書きができない人はほとんどいないだろうと思っている方が多いのではないのでしょうか。日本は中学校までが義務教育で、高校も授業料の無償化や就学支援金の支給で多くの人が進学でき、世界のなかでも教育水準の高い国として知られています。

しかし、2020年の国勢調査によれば、15歳以上の未就学者は約9万4千人、小学校しか卒業していない方が約80万4千人、合わせて約90万人の方が義務教育を修了していません。そのうち、日本国籍の人が7割近くを占めています。さらに、この数値に含まれていない不登校の長期欠席児童など、中学校の卒業証書は得たけれども実質的な基礎学習は保障されてこなかった「形式卒業者」が数十万人から百万人以上いると推計されています。そのことを考えれば、日常生活や経済活動に最低限必要な読み書きに困難を抱えているひとが無視できない数で存在しているといえます。

リテラシーはもともと文字の読み書き能力を意味しましたが、いまではネットリテラ

シーやヘルスリテラシーなど、ある特定の主題分野で知識を活用する力として使われています。私たちの生活には、さまざまな知識や能力が必要です。今日はこれからの大学生活に必要なリテラシーについて、お話ししたいと思います。

いま私たちが身につけるべきリテラシーとは、どんな能力なのでしょう。

たとえば、マイノリティ・リテラシーです。この30年でヒト・モノ・カネの世界的な流動性がいじめるしく高まり、全国各地で教育を受けたり働いたりする外国人が多くなりました。あるいは、みなさんの中にも、海外留学を考えている方がいるかもしれません。観光や旅行ではなく、修学または仕事のため外国で一定期間生活するようになると、日本でマジョリティとして暮らしていた時には感じることがなかったさまざまな不便を経験するでしょう。グローバル化と多様性の時代においては、誰もがマイノリティになりうるという現実に向きあう必要があります。

私自身もスイスのヌシャテルという人口3万人程度の小さな街で暮らしたことがあります。研究仲間10人くらいでランチに行くと、同じ国や地域から来ているひとは一人もおらず、みんなが「マイノリティ」でした。街ではフランス語が話されていましたが、研究の現場では英語が共通言語でした。でも英語がネイティブのひとは誰もいないという状況で、私自身は生活言語のフランス語を英語で教えてもらったり、知っていると思っていた日本の歴史や文化をうまく説明できないことに気づいたりという、多文化・多言語の環境の貴



総長

藤井輝夫

重な経験をしました。

日本社会でも、すでに多文化・多言語の環境が生きているということを気づかせてくれる興味深い絵本があります。『オリーブかあさんのフィリピン民話』という、この絵本の民話の語り手は、フィリピン国籍の女性です。深刻な「嫁不足」に悩んだ山形県が1980年代後半に自治体主導で展開した国際結婚の「外国人花嫁」として来日しました。農村の深刻な社会問題の解決を目指して試みられた政策は、いまではもう忘れ去られているかもしれません。しかし、この絵本はその地域で生まれた現実を、静かに証言しています。

描かれているのは、日本に来て母となった女性が、日本国籍の我が子に語る、ふるさとのフィリピン民話です。なぜ、その絵本が山形弁で書かれ、そこに標準語のルビが振られているのか。そこに外国人花嫁が経験した現実があります。この女性が学んだ日本語は、夫の母親たちの世代が語る純粋な方言で、村



の生活に懸命に適応しようとした証でしたが、多くの女性たちがさまざまな理由から離婚します。村ではフィリピンの言葉で子どもに話しかけることが禁じられていました。この絵本の作者もまた、夫や子どもと別れて、配偶者ビザ更新の不安を抱え、家族の写真を壁に貼って一人暮らす状況になります。山形弁で語られた故郷の物語は、会うことができない子どもに向けた語りでもあったのです。まさに、この一冊のなかに、グローバルな要素とローカルな要素がからみあっています。

この絵本はまた、日本で暮らす多くの外国人が抱える困難の一つに、日本語習得の問題があることを示唆しています。とりわけ、中国や韓国などの他の漢字文化圏とは異なり、日本語では漢字に音訓があり、その読み方が一つではないため、習得に難しさを感ずるひとが多いと言われています。この困難は、外国人に限らず、冒頭で話した義務教育の未修了者にも共通するものでしょう。東京大学の入学試験を突破してきたみなさんは、あまり感じたことがないかもしれませんが、この問題はグローバル化のひとつの内なる壁ともなっています。

さきほど話題にした絵本にもあらわれる、「ルビ」の文化は、漢字熟語を学習する貴重な機会でもありました。読み方が判れば、辞書を引くことができます。そして昔の本や新聞には、じつはかなり丁寧にルビが振られていました。いまは子ども向けのごく限られた本にしか、ふりがなを付けないのが当たり前になっています。この意味で、2023年に設立された一般財団法人ルビ財団の取り組みは注目できます。「社会にふりがな(ルビ)を適切に増やすことであらゆる人が学びやす

く、多文化が共生する社会づくりを目指す」としているからです。リテラシーの獲得には、これまで当然に思っていた社会規範や通念に対する再検討も必要となります。

みなさんにも、創造的な地球市民に求められるリテラシーとして、語学能力や異文化理解、国際標準への対応だけではなく、自国・地域に根差したローカルな視点と、マイノリティの経験や文化を承認し受けとめる姿勢を身につけていただきたいと思います。

現代社会に必要なリテラシーとは何かを考えるうえで、AIとどう向きあうかも、たいへん重要でしょう。

2022年に発表されたOpenAIによる対話型の「ChatGPT」は、全世界から高い関心を集めました。専門知識やスキルがなくても、ユーザーがチャット形式で指示を出すだけでテキストや画像、映像などの多様なアウトプットが簡単に得られます。その点で多くの人びとの興味を一気に惹きつけました。

みなさんもすでにさまざまな場面でこの生成AIを活用していると思います。文章やプログラムや仮想映像が簡単に作れて、私たちの生活に大いに役立っています。その一方で、AIが生成する応答には、事実に基づいていない情報や偏った断定が含まれる可能性があることを忘れてはなりません。それゆえ、私たちは生成AIの提示する情報や提案に対し、自らの視点や専門知識から検討する力を身につける必要があります。正確かどうか以外にも、プライバシーの保護や、バイアスへの対処、ディープフェイクの技術を悪用した偽の画像の氾濫など、倫理的に避けて通れない課題も抱えているからです。

生成AIをめぐるテクノロジーはさらなる進展が予想される一方、まだまだ発展途上だとも言えます。たいへんな物知りで探し上手だけれども、検証が必要な間違いや偏った知識を教えるかもしれないすこし偏屈な「対話」の相手として捉え、つきあっていくことが大切です。問いの質を高め、批判的思考を持ちつづけることで、これまでとは違う視点から新たな基準や構造を創り上げていく力も求められます。

望むと望まざるとにかかわらず、これからの時代、私たちはAIとともに生活していくことになるでしょう。AIが運転する乗り物で移動し、AIと会話しながら仕事を進め、AIを搭載したロボットや家電製品が家事をこなしてくれる、という日常はすぐそこまで来ているかもしれません。創造的な地球市民としての批判的思考と、他者に対するより深い理解や配慮に基づく、新たなリテラシーを育むことが求められます。これは、どのような学問分野の学びにおいても欠かすことのできない視点であり、またそれぞれの分野において新たな領域を拓くことにもつながるものです。ぜひそれぞれに考えてみていただきたいと思います。

「マイノリティ」や「AI」をめぐる話題は、獲得すべきリテラシーの例示にすぎません。これから始まる東京大学での生活は、新しい知識だけでなく、新しい視点や人びととのつながりをみなさん一人ひとりにもたらしてくれるでしょう。大学生活を通じて、学びはもちろん、困難に立ち向かう力や誰かを支える心を育んでください。

ご入学、おめでとうございます。



教養学部長式辞



教養学部長

寺田寅彦



来賓祝辞

ヒューマン・ライツ・ウォッチ
日本代表

土井香苗 様



来賓祝辞



東京大学校友会会長

國部 毅 様



入学生総代宣誓



教養学部

上村綾美 さん

本日はこのような素敵な式典をご挙行頂き誠にありがとうございます。東京大学での生活を始められます事を入学生一同心より嬉しく、晴れがましく思います。今まで支えてくださった全ての方々に心から感謝申し上げます。

さて、今は空前の第三次人工知能ブームです。絵を描き、文章を紡ぎ、膨大なデータ処

理を以って我々を圧倒する人工知能の進化スピードを見れば、AIとの共存を実現した将来、どのような景色が展開していくのか想像できません。では、現在、我々にできることは何でしょうか。結局それは太古の昔から変わらず未知を開拓し答えのない問いに向き合う事です。

世界はかつて、今ほどクリアではありませんでした。そこに数字や言語などのシステム、哲学や科学などの学問を創造し、世界を明確に捉えるフレームを与え継承し歴史を形成したのが人類です。その先に未来を繋いでいくのが私達です。

これだけAIや科学技術を発展させるに至った人類ですが、今日も世界中で凄惨な戦いが続いています。恒久平和という、人類普遍の願いかつ未達成の難題に対し、一人一人が国際社会への参画を自覚する。文化や言語の異なる国で空爆に震えるその人が誰かの大切な人で、自分たちと同じように平和と幸福を希求しているのだと理解する。今、平和を享受する身としてどれだけこれらのことができるのか、どれだけ国境を超えた地に想い

を馳せられているのかと自問しています。

1920年代に初めて台本中にロボットという言葉を使ったチャベックの戯曲「ロボット R.U.R.」が喝采を浴び、SF作品とそのファンが増えるにつれ何度も論じられてきた事です。一様なデータの集積であるAIに対し、人間には自然発生的な個体に固有の感情があります。得意分野、価値観、背景の異なる人々が、一人が二人、二人が三人と集まれば個人の能力の単なる合計ではなく人間特有の相乗効果によるパフォーマンスの向上が見られる事でしょう。

だからこそ、私達は今日、この学び舎に集いました。各分野を牽引される先生方、初めて触れる学問、ともに学びを探究する友との出会い、全てに期待で胸が膨らみます。ボーダーを超え協働して歴史を紡ぐことのできる、深さ、厚さ、柔らかさのある人材となるため、周囲への感謝とリスペクト、素晴らしい環境で学ぶ機会に恵まれた自覚、責任を持って、日々邁進することをここに誓い、新入生代表挨拶とさせていただきます。



令和7年度大学院入学式総長式辞

新入生みなさん、大学院入学おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。みなさんは東京大学の大学院で、専門知識を基盤に、自ら問いをたて、答えを見いだしていくこと、さらにその成果を世界に向けて発信する活動にたずさわることになります。

そこで問われるのが独創性、すなわち、模倣に終わらない、自分独自のものがあらわれているかどうかです。独創的なものを生み出すためには「自己」の確立が必要だとよくいわれます。しかし「自己を確立する」とはどのようなことでしょうか。

本日は、この問いをみなさんとともに考えてみたいと思います。

まず、私たちの身体のマカニズムにおいて、「自己」とはなにかを考えてみましょう。身体的に「自己」を定義するシステムとして免疫系があることは、よく知られています。みなさんは免疫と聞くと、たとえばCOVID-19やインフルエンザの病原となるウイルスを「自己ならざるもの」として識別し排除する仕組みを思い浮かべるでしょう。そのマカニズムを利用した予防の技術がワクチンです。ワクチンは、免疫系に病原体の情報をあらかじめ学習させることで、実際に感染した際に迅速に対応することを可能にします。本学の薬学系研究科で学んだ古市泰宏博士は、メッセンジャーRNAの先端のキャップ構造がタンパク質の翻訳に必須であることを世界に先駆けて発見しました。この発見は新型コロナウイルスワクチンの開発にも応用されました。

たしかに、ウイルスや細菌などの微生物は、

病気を起こす「敵」であると長らく考えられてきました。しかしながら、実際にはどこまでも敵でしかないような有害な微生物は極めてまれです。逆に、ヒトの消化管や皮膚にはさまざまな微生物からなるコミュニティが存在し、ヒトと共生関係を結んでいます。これらの微生物がもつ多様な遺伝子とその働きが、私たちの生命と健康を支えていることが明らかになってきています。むしろ、共存している微生物のコミュニティとの関係が損なわれると、自己免疫疾患やアレルギー、肥満、癌などいろいろな疾患の発症リスクが高まることがわかってきました。

つまり免疫系は、微生物を「自己ならざるもの」として排除しているのではなく、むしろ「自己」を構成する一部として受け入れてもいるのです。このような共存の仕組みを、心が広く他人に寛大であることになぞらえて「寛容」といいます。自分の身体や胎児を攻撃することを防ぎ、食物に対してアレルギーを起こさないことも、この「寛容」の仕組みによっています。

「寛容」のマカニズムについて、現代医学でのとらえ方は進化しました。

かつては、「自己」を定義する中枢が存在し、免疫細胞が反応すべきか否かを一元的に管理し、集権的に動かしていると考えられていました。しかし、この半世紀にわたる研究から、「自己」はそのような、いわば「独裁者」として存在しているのではないことが明確になります。つまり、それぞれの免疫細胞が相手を認識しながら、積極的に相互作用し、その場に応じて適切な関係を築くことで、免疫系全体としてどのように反応するかを複合的

に決めていることがわかってきたのです。別な言い方をすると、免疫現象においてあらわれる「自己」は一定不変の「存在」ではなく、「現象」であり「働きかけ」であり「プロセス」であるということになります。つまり他者と向かいあい、対話を重ねることによって「自己」が発展し、変容しながら形成されるダイナミクスが存在することを、身体の免疫系の研究は教えているのです。

このように生体が有する分散的で柔軟かつダイナミックな振る舞いを工学に取り入れようとする概念として、1980年代後半から「自律分散システム」が提唱されます。全体を制御する中枢をもたず、複数の独立した要素、エージェントが自律的に動作し、他の要素と相互作用することで全体として秩序ある振る舞いを生成するシステムのことです。日本独自の発想による研究として、1990年からプロジェクト化され、広く国内の研究者が参加して、生体に学び、そこから理論を導きだし、システムを工学的に構築するための方法論を見いだそうとしました。たとえば免疫系が多様な「他者」に対して、柔軟にかつ分散的に対応できる性質に着目して、ニールス・イエールネ (Niels Kaj Jerne) が提唱した「免疫ネットワーク」モデルを用いてロボットの制御やセンサネットワークの構築を手がける研究なども行われます。私自身も当時、自律分散型ロボットシステムの研究に取り組みました。この「自律分散システム」の考え方を、システムの機能設計の方法論へと発展させようとする試みとして、1990年代半ばごろには「創発システム」という考え方が提唱されます。自律分散システムを構成する要素群の相互作



用のみならず、それによって生ずる局所的だけでなく大域的な秩序に着目して、新しい現象や機能を生みだそうとするものです。

免疫系はまさにこの二つのシステム概念をそなえる典型例だといってよいでしょう。多種多様な細胞が自律的で分散的に振る舞いながら、協調的あるいは競合的に相互作用することで、新たな「自己」が形成されます。そのシステム全体に、病原体を識別して排除する秩序があらわれます。

では、新たな「自己」の創発にとって必要になる条件とはどのようなものでしょうか。一つには、システムを構成しているそれぞれの要素に多様性があることです。そして、もう一つは他者との対話をどうデザインしていくかという問題であり、対話の双方向性です。すこし視点を変えて、微生物のほうから「自己」の問題を考えてみましょう。

いま薬剤に対して耐性をもつ病原菌の蔓延が、世界的に解決すべき大きな課題となっています。しかしこれは病原菌の側からみれば、新たな「自己」の創発です。われわれ人類は、20世紀前半に抗生物質であるペニシリンを発見して以来、さまざまな抗菌薬を開発してきました。一方で、微生物の側も薬剤耐性を進化させ、抵抗力を生みだしてきました。

この進化を可能にしたのが、集団としての微生物のなかにもともと存在している多様性です。抗菌薬という選択圧に対して耐性をもつ菌だけが生き残り、次世代を生みだして蔓延したのです。この例は、システムのなかに多様性が存在することが、環境変化に対して適応するために必須であることを示す良い例です。人間に置きかえて考えても、一人ひとりのなかに多様性が存在していること、さまざまな視点や経験を幅広くもつことが、生き延びていく

ために大切だといえるかもしれません。

他方で、薬剤耐性菌が繁殖してしまった大きな要因として、抗菌薬という選択圧を一律かつ一方向的にかけつづけたことも見落としではなりません。病気の原因となる微生物の特質を探究して細かくコントロールするような標的型薬剤の開発よりも、無差別に作用する抗生物質を一律に用いつづけた結果として、耐性菌への進化が促進されたからです。いかえれば、一方向的な作用によって、つまり対話を通じて学ぶ姿勢の欠如によって、耐性菌という敵対的な他者が生みだされてしまったわけです。

このような免疫系における「自己」や「寛容」や「対話」の問題は、物質的な身体のレベルを超えて、人間の心や人びとが集まる社会といった異なる水準にも一般化して考えることができるでしょう。

ランディ・シルツ (Randy Shilts) というジャーナリストがエイズ流行の最中、1980年代に書いた *And the Band Played On: Politics, People, and the AIDS Epidemic* というルポルタージュがあります。この作品では、エイズという新たな侵入者に対し、政治家も、官僚も、風俗産業経営者も、輸血・血液製剤業界も、医療関係者も、解放運動家も、宗教者も、多くが無関係であろうとし、現実を直視せず、自分たちだけを納得させる説明に閉じこもり、率直に話しあおうともしなかった。その実態と原因とが、多面的に論じられています。つまり、アメリカ社会それ自体の「免疫不全」の状況が描かれているともいえるでしょう。

対話は、事実をありのままに観察し、そこにあらわれた問題を共有するところから始まります。そして、さまざまな意見の違いをそ

の背景にまでさかのぼって理解し、ともに目指す理想がどこにあるのかを探っていく努力こそが、地球規模課題の解決には必要なのではないのでしょうか。

最初に論じた「自己」の確立、あるいは独創性の追求という話題に戻って考えてみたいと思います。

これまで見てきたように、「自己」とは他者との交流や対話のなかから創発される現象でありプロセスです。みなさんは、大学院の研究室での観測や実験や解読や調査などの研究活動を通して、素材となる研究対象と対話を重ねるでしょう。あるいは社会とのつながりのなかで、多様な人びとと出会うでしょう。それは、みなさんの可能性を拡げてくれるチャンスです。このような他者との出会いにくわえて、がんばっていた過去の自分や、望ましい未来の自分という、自分のなかのもう一人の他者と真摯に対話することは、独創性の追求への糸口となるでしょう。

出会いは一期一会であるからこそ、知覚 (perception) と働きかけ (action) の精度を高めることが、独創性の追求において大切です。「多様な他者」という抽象的な理解にとどまらず、出会うひとそれぞれの個性と向かいあってください。ここから始まる大学院の生活で、これまで知らなかったひとやものとの対話する過程が、独自の「創発システム」として新しい「自己」を生みだし、みなさん自身が驚き、そしておもしろく感じ、楽しく思えるような未来を拓いていくでしょう。みなさん一人ひとりの探究のプロセスが、ユニークで、ダイナミックで、歓びに満ちたものとなることを心から願っています。

あらためて、大学院入学おめでとうございます。



研究科長式辞



数理学系研究科長

平地健吾



来賓祝辞

沖縄科学技術大学院大学
学長兼理事長

Karin Markides

様



おまけ

入学式の式辞・祝辞で紹介された書籍情報

●寺田寅彦先生が学部式辞で紹介
『寛容論』
(ヴォルテール、光文社、2016年)



●土井香苗さんが学部祝辞で紹介
『人間の大地』
(犬養道子、中央公論社、1983年)

●平地健吾先生が大学院式辞で紹介
『一数学者の弁明』
(ハーディ、みすず書房、1975年)



今回の入学式で紹介された書籍のうち、UTokyo
OPACでヒットしたもののQRコードを掲載しました。
最寄りの東京大学附属図書館で読んでみては？

入学生総代宣誓



理学系研究科

臼井健人 さん

本日は、このような素晴らしい入学式を挙
行していただき、心より感謝申し上げます。
これから、新たな知の創造という目標を共有
する仲間と、切磋琢磨しあえる環境で研究を
行うことができることに、喜びを感じるとも
に身が引き締まる思いです。また、このよ

うな恵まれた環境で研究をする機会を与えて
くださった両親や家族、友人、先生方にこの
場を借りて感謝を伝えたいと思います。

私の専攻する地球惑星科学の分野では、マ
ントルやコアといった地球の内部深くから、
大気、海洋などの地球の表層環境と、そこに
生息する生命、そして遠くの惑星や衛星など
の宇宙に及ぶまで幅広い範囲を研究の対象と
しています。このように広範な対象を相手に
研究するため、研究方法も観測から実験、数
値計算など多岐にわたります。しかし、われ
われを取り巻く自然を深く理解したいという
知的好奇心が研究の原動力である点は、共通
しています。私たちはこれから、それぞれの
専門分野の研究に邁進していきますが、周囲
の物事に興味関心を抱き、そのことを詳しく
調べたいという知的好奇心は、どの分野にお
いても欠かせないものです。われわれがこれ
から携わる新たな知の創造という営みは、先
人たちの蓄積してきた研究成果を土台に、前
人未達の領域に一步踏み出すということであ

り、一朝一夕で達成できるようなものではあ
りません。確かな論拠を提示するために、何
度も調査に出かけたり、実験を繰り返したり
と地道な取り組みも多く、壁にぶつかり諦め
たくなるときもあると思います。そのような
ときに、純粋な知的好奇心こそが、諦めず、
粘り強く努力する力を与え、突破口を見つけ
る助けになります。そして、純粋な知的好奇
心を原動力として長年、蓄積された知は、地
球温暖化に伴う気候変化といった、地球規模
で社会が抱える課題に対しても、重要な知見
を提供することができると信じております。

よって私は本学の新入生を代表して宣誓し
ます。研究を志した時の初心を忘れず、知の
営みに参加する一人として、先人の積み上げ
てきた研究成果に敬意を払い、それをさらに
発展させていきます。そして、その知が、豊
かな社会を実現することに貢献することを願
って、日々研究に邁進することをここに誓い、
宣誓の結びといたします。





海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第37回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト——海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

高校生サミット in 奄美 ～群島をつなぐ探究学習支援の輪～

大気海洋研究所附属
国際・地域連携研究センター
地域連携研究部門 准教授

平林 頌子



FSI事業“亜熱帯・Kuroshio研究拠点の形成と展開”プロジェクト（第30回の記事参照）が2021年に始動し、その専任講師として大気海洋研究所に着任して以来、奄美群島の美しい自然や人情味あふれる人々に魅せられながら、研究や人材育成事業に取り組んでいます。本稿ではプロジェクトの一環として支援している、奄美群島高校探究学習コンソーシアムに関してご紹介します。

奄美群島には12市町村があり、高校は9校ありますが、それらの高校の先生や生徒たちとの話の中で、海水温上昇や赤土流出のサンゴへの被害、大雨や津波への防災対策などに関心を持ち、調査をしたいと考えている生徒がいることがわかりました。しかし、奄美群島には大学がないこともあり、具体的な研究の進め方が分からなかったり、行き詰まってしまうケースもあるようです。また、類似した研究テーマに関心を持つ生徒が各校にいるにもかかわらず、高校間での交流や意見交換の場が少ない状況にありました。

そのような中、奄美群島全体の高校をつなぎ、大学研究者と連携した探究学習の指導体制を構築する「奄美群島高校探究コンソーシアム」が2024年3月に設置されました。そのきっかけになったのは、2023年11月に大気海洋研究所が奄美大島で開催した本プロジェクトのシ



「高校生サミット in 奄美」開会宣言

ンポジウムでした。このシンポジウムに参加された地元の大島高校の校長が、奄美群島をフィールドに研究する多くの研究者の姿を目にされたことが大きな転機となり、コンソーシアムの設置に至りました。このコンソーシアムには、奄美群島内の高校9校、7大学、1企業が参加し、大気海洋研究所も参画機関の一つとして高校生探究学習を支援しています。

2025年3月19日には、第2回「高校生サミット in 奄美」が大島高校で開催され、私も初めて参加しました。各校を代表する生徒たちは、「総合的な探究の時間」での研究成果を発表し、自然、文化、歴史、教育など地域の課題にアプローチしていました。テーマは多様でしたが、その根底には「自分たちの地域をより良く

したい」という熱い奄美愛（郷土愛）や強い意志が感じられました。

高校生の探究学習の成功には、生徒自身の努力は勿論のこと、地域の大人たちの支援も欠かせません。多くの地元企業が協賛し、地域サポーターとして高校生の調査取材に協力し、研究に関する助言を行い、彼らの提案を実践する場を提供しています。こうした支援があるからこそ、奄美群島高校探究コンソーシアムは成り立っています。

高校生サミット終了後、コンソーシアムに参画する大学、企業、自治体が集まり意見交換会が開かれたのですが、その会場に飾られていた掛け軸の言葉が心に残っています。それは「筆筒を売り 田を売り 家を売り 鹽を売り 全てを売り 貧しくても 子供を育てる」というものです。聞けば、オーナーは元中学校校長で、島外に出た（島立ちした）奄美の若者が帰郷した際に集まれる場所を作りたいと考え、定年後に店を開いたとのこと。この日の経験を通じて、奄美群島の人々の、若者の教育への熱意と地域を守り支える気概を感じました。私たちの活動を通じて、奄美群島の環境保全や地球環境を守るために取り組む若者たちが増えることを願っています。



各校の発表を熱心に聞く高校生たち



発表終了後、お互いの地域やこれからの奄美について語り合う様子



「海と希望の学校」公式 X (@umitokibo)

バックナンバー→www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



UTokyo 第33回 バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見⑧

自転車整理スタッフ

の巻



数千台の自転車を美しく整理

本郷キャンパスの駐輪場は100カ所以上、駐輪許可登録されている自転車は5000台以上。それらを整理し、整然とした美しい状態にしているのが2007年に発足した施設部環境課の自転車整理スタッフ。聴覚障害がある職員5名とコーディネーター1名のチームです。本郷、浅野、弥生、病院地区をバランス良く巡回し、雑多に置かれた自転車の位置を整理し、未施錠の自転車には注意書きを貼り付け、周辺の美化や看板などの管理も行っています。

「利用者が自転車を出し入れしやすいような間隔を意識しながら整理しています」と話すのは2024年に入職した小林百笑夏さん。基本は自転車の向きをまっすぐに並べていくことですが、台



打ち合わせは、音声認識ソフトや手話通訳を介して行います。

数が多い駐輪場では斜めに置き、歩行者が通りやすいように整理しています。前輪の角度を調節したりといったコツをつかむのがなかなか難しいと話するのは2年目の瀬口沙良さん。「先輩方から指導を受けて日々頑張っています」

作業は8時半から15時半まで。悪天候の日は室内でデータ入力や掲示物の作成などを行います。パワーポイントを駆使して様々な掲示物を作成している安江武祥さんは、2021年に入職してから使い方を習得したそうです。屋外での作業中には、観光客などから道を聞かれることもしばしば。「どう対応すればいいのか最初は戸惑いました」と9年目の井上英生さん。チームで考え、現在は日英併記の構内マップや音声認識アプリを入れたスマホなどで対応しています。3年目の入澤小次郎さんは手作りのコミュニケーションカードも携帯し、指差しなどでやりとりすることも。手話で「おつかれさま」は、右手の握りこぶしで、左手の手首をトントンと2回軽くたたく動作。構内で見かけたら、「おつかれさま」と声をかけてみてください。



左から、瀬口沙良さん、入澤小次郎さん、コーディネーターの中田慎さん、井上英生さん、小林百笑夏さん、安江武祥さん。「おつかれさま」の手話でポーズ。

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives



第55回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

「移牒」の話 —公文書に記された古代の言葉?

本学のシンボルは銀杏の木ですが、今回はそのイチョウのことではありません。昭和20年代の「文部省往復」という本学と文部省（現文部科学省）との往復文書綴りのうち、ある文書に「移牒」と記されていました。移牒とは、一つの官庁から管轄の異なる官庁への通知や、その文書のことです。

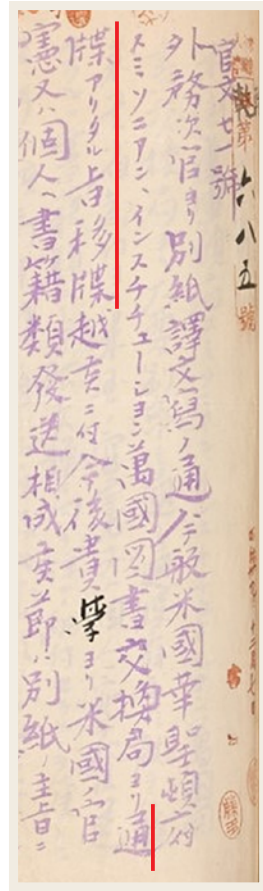
今から1,300年ほど前、7世紀末から整備された基

本法である「律令」の「公式令」では、公式様文書という行政文書について定めています。ここに含まれる「移」は直属関係にはない官庁が取りかわす文書、「牒」は官庁から、それに準じる所または官庁ではない所に出す文書でした。明治時代以降、「移」「牒」のふたつを組み合わせて「移牒」を用いることにしたようです。

当館のデジタルアーカイブでは、件名に「移牒」が含まれていても中身の公文にはない文書があります。また、明治39（1906）年の「文部省往復」には、米国から外務省への「通牒」（文書による通知）が文部省に「移牒」され、澤柳政太郎文部次官から浜尾総長あてに進達された文書が綴られています。通牒と移牒を使い分けた例です（S0001/Mo128/0033）。

古代の律令制を模した明治の太政官制のもと、官庁どうしの通知は「移牒」とされ、戦後まで受けつがれたのでしょうか。ある官庁職員によると「30年を超える公務員生活で、（移牒という用語は）一度も使ったことがない」とのこと。一体、いつから使用されなくなったのでしょうか。

（学術専門職員：寺島宏貴）



東京大学文書館

ワタシのオシゴト 第227回

RELAY COLUMN

工学系・情報理工学系等事務部
学務課総務・学生支援チーム

前原里咲

ゆめ



HASEKO-KUMA HALLにて

こんなひとでありたい こんなふうになりたい
そんな理想や憧れが、日々の原動力です。

東大に就職して、もうすぐ3年。たくさんの方の背中を見て、たくさんに影響を受けました。東大はこうして支えられているんだなという場面を数々見て、自分もそうなりたい、そればかり日々考えています。

昨春に着任した工学部では、大学職員の顔ともいえる学生支援業務を担当しています。総務・学務・教務にまたがる業務を広くこなす毎日は試行錯誤の連続です。従来の体制も大切にしつつ、手を加えられる所は効率化をはかったり、そんな継承と進化のバランスに悩んだりもします。窓口に来た学生さんの対応、行事の企画運営、奨学金や学費免除の事務、教職。通勤電車と寝る前の30分は資格取得の勉強をしたり。大変なこともあるけど、応援してくださる上司・先輩・同期に恵まれて本当に幸せでがんばってよかったなと思います。自分がいることで、社会にとって何かプラスになり、ひとのためになれたら嬉しいなと思います。



京都・鴨川の沿にて

得意ワザ：書道・クラシックギター・動画編集

自分の性格：「まっすぐ」とよくいわれます（笑）

次回執筆者のご指名：市川 祐さん

次回執筆者との関係：前部署（財務部契約課）の後任

次回執筆者の紹介：面白くて頼れるしごできお兄さん

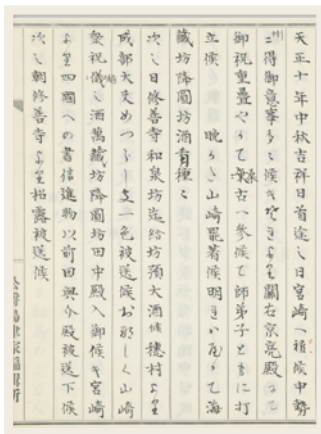
デジタル万華鏡 第45回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

史料編纂所助教

畑山周平

「島津家本」にもご注目を！



面高真連坊頼俊日記／島津家本のうち

史料編纂所の所蔵品のうち、著名なものの一つに国宝「島津家文書」がありますが、これと似た名前の「島津家本」という史料群も存在します。島津家本は、近代になって旧鹿児島藩主島津家が設置

した、公爵島津家編輯所に蓄積された史料群で、近世後期から近代の作成にかかる冊子体の写本が主体となっています。

島津家文書が源頼朝や豊臣秀吉など、中世以来の著名人の古文書原本を含み、「武家文書の白眉」と称されているのに比べると、写本ばかりの島津家本は一見地味に思えます。ところがよくよく見てみると、その中には、他にはない中世史料の写や、近世・近代の歴史研究の足跡がうかがえるような貴重な史料も含まれているのです。そこで史料編纂所では、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業を活用して、島津家本のデジタル化に取り組み、活用促進を図っているところです。

島津家本の重要性を示すべく、一つ史料を紹介しましょう。『おもだかしんれんぼうらいしゅう面高真連坊頼俊日記』は画像を見れば明らかなおとおり、罫紙にほぼ楷書で記された、それほど古くはなさそうにみえる史料です。ところが内容を検討してみたところ、これは戦国時代の1580年代、使者として四国・中国地方に赴いた、島津家臣の日記の写だと判明しました。そのため本史料からは、当時の九州・四国・中国の交通ルートや、長宗我部元親・毛利輝元などの戦国武将の動向といった、非常に貴重な情報が拾えるのですが、実はこの史料、一見近代史料のようにみえることもあってか、これまでほとんど存在が知られていませんでした。

このように、島津家本にはまだまだ「未知のお宝」が埋まっている可能性があります。その画像は上記日記も含めて、史料編纂所データベースおよび東京大学デジタルアーカイブズポータルを通じて順次公開しますので、ぜひご活用ください。

<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/shimazu-ke-bon>

インタープリターズ・第212回 バイブル

総合文化研究科 客員教授
科学技術コミュニケーション部門

青野由利

字になるか、ならないか

長年、新聞社で科学記事や科学コラムを書いてきた（という話は以前も書いた）。その結果、「職業病」のように身につけてしまった癖がいくつかある。

定時のニュースを聞かないと落ち着かないこと、いつも電話が気になること、お昼も夜もご飯を食べる時間が遅いこと。こういった習慣は3年前に退社してから徐々に抜けたが、先日、「これはなかなかしぶとい」と気づいた癖がある。

どこに行っても、何を見ても、何を聞いても、「これは字になるか、ならないか」を反射的に価値判断してしまうことだ。

「字になる」とは、つまり「記事にできるかどうか」。駆け出しの記者だったころネタ探しにとっても苦勞した。それが高じて、「字になるかどうか」を瞬時にふるいにかけるセンサーが脳内にできてしまったのだ。

新聞社勤務だったころは、その脳内センサーに疑問を抱いたことはなかった。むしろそれがなければ仕事に支障が出ただろう。

でも最近、これってまずいんじゃないの、と反省するようになった。記事にならなくても、重要だったり楽しかったりすることはいくらかもある。なのに、「字にならない」と判断したとたん、その対象への興味が失いがちであることに気づいたのだ。

そんなことを思いつつ、3月末、駒場で開かれた「科学技術インタープリター養成プログラム」の修了式をのぞきにいったら、反省を忘れて脳内センサーが作動してしまった。「字になりそう」なテーマが満載だったからだ。

たとえば『チ。—地球の運動について—』を題材に、科学史の史実と異なるフィクションを含むマンガが学問への導入に資するかどうかを分析した研究。自ら短編SF小説2編を書いて、数学を学ぶ動機付けへの小説の影響を分析した研究等々。いずれもユニークな視点が刺激的だった。

それとは別に、もうひとつ感じたことがある。学生たちがお互いに言いたいことを言い合いながら、（たとえ苦しい場面があったとしても）楽しく課題に取り組んだ様子が伝わってきたことだ。

もちろん、「字になるかどうか」より、これが大事なのだ。

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第66回

ディベロップメントオフィス
シニアディレクター

庄司英里

『卒業生の東京大学ガイドブック』制作

希薄だといわれている卒業生と東大の関係を深めるため、この度初めて「卒業後の東大歩き方ガイド」を作りました。制作担当メンバーのコメントです。



東大出身を楽しんでほしい、このことをいちばんに企画編集。全学に散らばっている宝物のような情報をぎゅっと詰め込みました。ある世代には懐かしい「はみ出し」にもご注目を！（庄司）

みんなが知ってる東大。卒業生ならより深く知ってるものと思っていたが、実はそうでもないらしい。多彩な卒業生たちが母校に思いを寄せてくれることを祈っています。（二瓶仁志）



全体デザインを担当。閉鎖的で固い印象を持たれがちな東大ですが、卒業生はもちろん実は地域に開かれたキャンパスでもあります。そんな温かい印象を感じられるよう工夫を重ねました。細部までご覧くださるとうれしいです！（野口勝央）

イラストを担当。表紙には東大ゆかりの方がさりげなく登場しているので、ぜひ探してみてください。誌面の内容とあわせて、イラストも楽しんでいただけたら嬉しいです！（野田百花）



このガイドはTFT登録卒業生に郵送しています。TFTは教職員・在学生も登録できます。この機会にオール東大のコミュニティにご参加ください。



10/18 (土) は東京大学
ホームカミングデイです！

母校に卒業生を迎えてのオール東大の祭典。ディベロップメントオフィスでは4月から準備を開始、企画参加を同窓会、部局、在学生団体に呼びかけていきます。どなたでも楽しめる企画のほか、卒業の節目を迎える方々を安田講堂にご招待しての周年祝賀式典を行います（卒業10～60周年までの10年毎の学年が対象）。同日に行われる周年懇親会の幹事団を募集中です。教職員として東大に勤務している卒業生のみならず、ぜひ幹事に立候補ください（こちらは卒業10～60周年までの5年毎の学年が対象）。

詳細は右記二次元コード
よりご確認ください→



トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
3月14日	医学系研究科・医学部	神経細胞生物学分野 岡部繁男教授が日本学士院賞を受賞
3月14日	総合文化研究科・教養学部	超域文化科学専攻 森元庸介教授が日本学士院賞を受賞
3月18日	本部広報課	広報誌『淡青』50号（課題号）を発行
3月18日	本部渉外課、工学系研究科・工学部	東京大学基金 総長×寄付者ダイアログ 第2回
3月19日	情報理工学系研究科	中村仁彦名誉教授が日本学士院賞を受賞
3月19日	本部広報課	NHK Eテレ特集シリーズ『日本人と東大』放送のお知らせ
3月24日	本部総務課	令和6年度東京大学学位記授与式を举行
3月25日	本部総務課	令和6年度東京大学卒業式を举行
3月25日	情報理工学系研究科	8大学同時共同開催「情報学 for all by all」開催報告
3月25日	広報室	世界の誰もがもっと来たくするための学修環境整備が不十分＝藤井輝夫、菅野暁 赤門が「開かずの門」と化している＝藤田香織 赤門とは何か——歴史と建築の視点から＝松田 陽、千葉 学 / 『淡青』50号「悩める東大」
3月28日	本部社会連携推進課	2024年度 フィールドスタディ型政策協働プログラム活動報告会を開催
3月31日	本部社会連携推進課	2024年度 体験活動プログラム報告会を開催
4月1日	本部広報課	令和7年度 部局長交代のお知らせ
4月1日	本部渉外課	三菱ガス化学株式会社とネーミングプランの協定を締結
4月1日	ディベロップメントオフィス	日鉄ソリューションズ株式会社とネーミングプランの協定を更新
4月2日	本部渉外課	新入生応援キャンペーン2025 東京大学基金へのご寄付でオリジナルグッズ贈呈！
4月3日	本部社会連携推進課	東京大学と株式会社電通とのパートナーシップ協定締結について
4月3日	本部経理課	令和7年度東京大学債券発行に係る主幹事証券会社および事務受託銀行を選定
4月4日	新領域創成科学研究科	「動く拠点から始まる地域自治」防災×モビリティ拠点 U30実践アイデアコンペ ゲスト講演会を開催
4月4日	先端科学技術研究センター	持続可能な未来を目指して 半導体の平和利用研究基金 寄付募集開始
4月4日	UTokyo College of Design企画調整室	UTokyo College of Design 記者発表を実施
4月7日	未来ビジョン研究センター、先端科学技術研究センター	フィリピン国砂糖統制庁と国際交流協定を締結
4月8日	先端科学技術研究センター	障害や多様性に開かれた社会を目指して—未来のリーダーを育むDO-IT Japanの挑戦
4月8日	本部環境安全課	第9回東京大学環境安全衛生スローガンコンテスト募集
4月9日	本部社会連携推進課	第3回東京大学地域連携シンポジウム 開催報告



CLOSE UP 部局長交代のお知らせ

4月1日付で部局長の交代がありました。

	新部局長	前部局長
大学院法学政治学研究科・法学部	沖野真己	山本隆司
大学院医学系研究科・医学部	南學正臣	(再任)
大学院人文社会系研究科・文学部	村本由紀子	納富信留
大学院理学系研究科・理学部	大越慎一	(再任)
大学院農学生命科学研究科・農学部	東原和成	中嶋康博
大学院経済学研究科・経済学部	粕谷 誠	古澤泰治
大学院総合文化研究科・教養学部	寺田寅彦	真船文隆

	新部局長	前部局長
大学院教育学研究科・教育学部	勝野正章	(再任)
大学院新領域創成科学研究科	伊藤耕一	徳永朋祥
医科学研究所	岩間厚志	中西 真
地震研究所	古村孝志	(再任)
大気海洋研究所	兵藤 晋	(再任)
先端科学技術研究センター	杉山正和	(再任)

※新部局長の略歴と前部局長の退任挨拶は全学ホームページでご確認を。



CLOSE UP UTokyo College of Design記者発表を実施 (College of Design企画調整室)



↑UTokyo College of Designのロゴを投影したスクリーンの前で構想を語る藤井輝夫総長。←初代学部長予定者として登壇したマイルス・ベニンントン教授。

4月4日、新たな教育課程UTokyo College of Design (UTokyo Design) 開設に関する記者発表を福武ホールにて行いました。東京大学は、未来社会に向けてさらなる学術貢献と人材育成の役割を果たすため、新しい学士・修士の教育課程の構想を全学連携で進めており、今回、その開設を報道陣に向けて発表しました。学部の新設を行うのは、1958年の薬学部以来、約70年ぶりのこととなります。

記者発表では、東京大学が150周年を迎える2027年の9月に開設すること、学士4年と修士2年からの教育プログラムで、早期修了制度を活用し、5年での修了も可能であること、入学定員は外国人と日本人がそれぞれ50名程度の計100名となること、入学試験に

ついては多様な視点、背景、経験、社会課題への意識を持つ学生を受け入れるシステムを検討中であること、授業はすべて英語で実施すること、初年次は全寮制とすること、単一の学術領域だけでは解決できない複雑な地球規模課題の解決を先導する人材の育成を目指すこと、4年次には留学やインターンなどの課外学習を必修として課すること、といった構想が、藤井輝夫総長から披露されました。また、初代学部長としての就任が予定されている情報学環のマイルス・ベニンントン教授も登壇し、「See the World Through Design. Then Change It」というスローガンで示されるUTokyo Designの展望について語りました。



CLOSE UP 2024年度体験活動プログラム報告会を開催

(本部社会連携推進課)



報告会では9名のプログラム参加学生が司会、受付、写真撮影などの役割を担い、運営を学生が主体的に行いました。このような形で、学生からプログラム関係者に対する感謝の意が示されることとなりました。

3月10日、伊藤国際学術研究センターにて体験活動プログラム報告会を開催しました。対面とオンラインを併用し、プログラムに参加した学生、受け入れ関係者、本学教職員など、国内外から約240名が参加しました。

藤井輝夫総長の挨拶後、プログラムの発展に大きく貢献した団体に対して感謝の意を表し、功績を称える「特別功労賞」の授与が行われました。今年度は、花巻市大迫総合支所地域振興課様、吉本興業ホールディングス株式会社様、中海・宍道湖・大山圏域市長会様が受賞されました。

続いて、5つのプログラム(「スイスにあ

る国際機関、研究機関、企業等を知る」、「ケニアスタディーツアー ～リアルなアフリカを学び楽しみ考える～」、「長浜曳山まつり 秋の曳山巡行体験事業」、「未来へ繋ぐ震災伝承」、「環境調和型技術としての超臨界水を学ぶ」)に参加した学生が、それぞれの体験から得た学びや、現地で得た経験を将来にどのように活かすかなどについて報告しました。報告後には、各プログラムで協力いただいた関係者の方々から、学生の受け入れに対する感想やメッセージが寄せられ、最後に津田敦理事・副学長より受け入れ関係者への感謝の言葉が述べられ、閉会しました。



CLOSE UP 広報誌『淡青』50号を発行 (広報室)

表紙は三四郎池脇の撒水ポンプ施設跡です



節目の50号目となる今号の特集は「悩める東大～大学の現状と課題」です。「世界の誰もが来なくなる大学」を目指して日々歩みを進める東京大学ですが、現状は理想にまだ遠く及ばず、課題は山積み。「そうは言っても東大はまだ余裕でしょ?」と思う人も学外には多いようですが、大学の象徴たる赤門は「開かずの門」となり、最新の生物科学を進める研究棟の壁は

崩れ、車椅子では通行しにくい道がまだ残り、構成員の多様性は不十分なまま……。こうしたことは多くの点で日本社会全体に関わる問題でもあるはず。今回の『淡青』は、大学と社会の厳しい現状に目を向け、課題として取り組む東大人の姿を取り上げています。経済学部資料室の古貨幣コレクションやUTCCのCNFボールペン&どら焼きを紹介する連載欄にもご注目。

UTokyo 次世代素材×ふんわり食感! のどら焼き

入荷のたびに即完売する人気商品、「どら焼き」。ふんわりとした生地、たっぷりのあんを挟んだ贅沢な一品です。焼き印は「東京大学ロゴ」と「赤門」の2種類をご用意。このふんわり食感の秘密は、次世代素材として注目される植物由来の極細繊維「セルロースナノファイバー (CNF)」。

さらに、真空パック包装により一般的などら焼きよりも日持ちがするため、おやつやお土産に最適な逸品です。店頭で見かけた際は、ぜひお買い求めください。(原)



どら焼き
1個 ¥350
4個(箱入) ¥1,500
(税込)

UTCCからのお知らせ



→オンラインストア

※どら焼きは店舗のみの販売です



入門者とともに学ぶ

教えると新しい発見をする。よく言われることである。私もそれを数限りなく経験してきた。目先のちょっとした改良につながることもある。自分が取り組んでいる分野の構造的な問題に気づかされることもある。

なぜ、このような基本的なことが教えられていないのか。様々な原因や文脈が浮かぶ。その分野の来歴、その分野の先端的議論の傾向、その裏返しとして基本的なことにどのように対応しがちかという風潮、など。その基本的なことを重視している職業集団が存在しても、広い意味での専門家界限の中ではなんとなく孤絶しており、外側にいる多くの専門家はその存在さえ忘れかけている、ということもある。そこにひとつの「構造」がある。

そのような構造が継続すると、教える側も、実は自分自身が駆け出しの頃にその基本的なことを教わったことがない。次の世代に、不確かな見よう見まねが伝承される。

先端に水をさすのは避けるとしても、環境を少しずつ変えることはできる。このような基本がある、これを知っていれば応用が効く、実はこれが正統的である。そうしたことをそ

れとなく提示して、浸透を図れば、その分野の改善につながり、新たな時代の構造をつくることもあるかもしれない。

入門者はどのような状況に置かれているのか。何が教えられているのか。そもそも専門家は入門者との間に接点を持っているのか。

その基本的なことを重視している職業集団では、日々どのようなことが語られているのか。何が依拠されているのか。なぜ、なんとなく孤絶しているのか。どうすればそうした集団から教わることができるのか。

そのような構造に思索をめぐらせることそれ自体が楽しいし、解決策を構想してそれとなく提示するのは、この社会の将来に貢献する可能性も高い。それらのことに取り組むのは、先端と同じくらい、知的に高度な営みである。

それは、昔の自分が違和感を持った諸事象についての壮大な答え合わせともなる。

白石忠志
(法学政治学研究科)

